

「世界遺産」 登録へ向けて

『阿蘇 火山との共生とその文化的景観』

先月号では、提案書『阿蘇 火山との共生とその文化的景観』における基本コンセプトと概要を説明しました。連載の最終回となる今回は、登録への前段となる「暫定リスト」入りを目指している各地域の推進状況を紹介します。

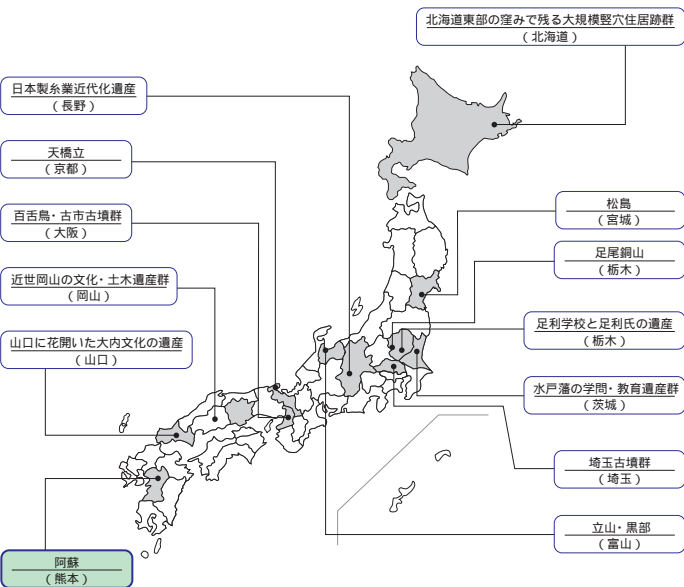
各地が誇る地域の遺産

従来は文化庁や環境省などが「暫定リスト」に掲載する候補地の選定を行ってききましたが、暫定リストに掲載されている物件が少なくなったことと、登録を目指す過程で地域での総合的な文化財保護の取り組みが格段に充実することなどから、平成18年度より自治体からの公募制となりました。

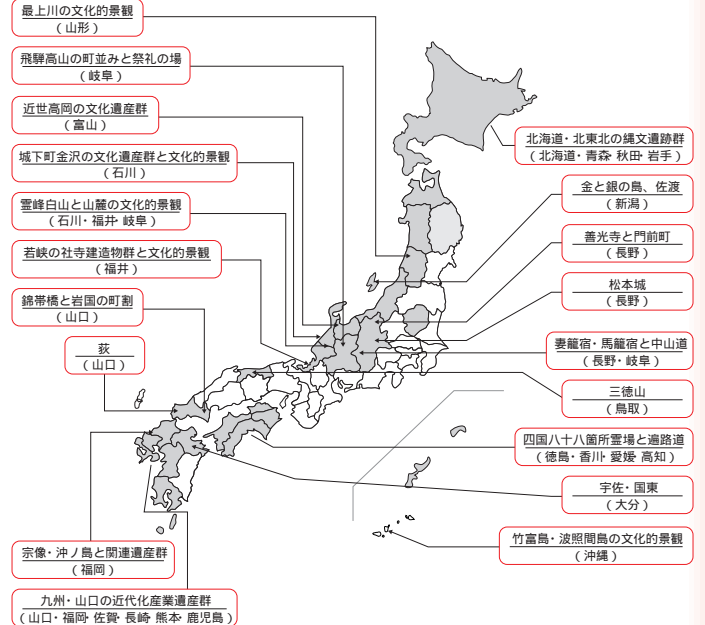
初年度の公募では24件が提案され、『富士山』や『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』など4件が暫定リスト入りを果たしています。その他の20件は継続審議となり、課題を整理し、主題や構成資産を見直した上で再提出が指示されています。

平成19年度は、前年の継続審議物件の中で、他県との統合もあり19件が再提出を行っています。また新たに阿蘇をはじめ13件が提案書を提出し、暫定リスト入りを目指している物件は最終的に32件となりました。

平成19年度に新たに提出された13件の候補物件



平成18年度の継続審議を受け再提出された19件の候補物件



「天草の宝を世界遺産に」

様々な分野におよぶ各物件には、地域を代表する有名な国宝や重要文化財が名を連ね、まさに日本が世界に誇るべき遺産の結集であるように思えます。現在、全国各地において、地方自治体やNPO等の市民団体を主体に世界遺産の登録を目指す運動が活発化し、それぞれの地域が一丸となって「大きな夢」の実現に向けて様々な取り組みが展開されています。

このようなかた熊本県では阿蘇郡市のほか、天草市、苓北町・宇城市・荒尾市が世界文化遺産の登録推進を行っていますので、これらの地域の推進活動について紹介します。

暫定リストに掲載された長崎県と関係市町は、世界文化遺産登録の推薦に向け、急ピッチで条件整備が進められています。その検討課題の中で「隣接県の事例を資産構成に含める検討が必要」との指摘があったことに伴い、いち早く天草が名乗りをあげました。

日本のキリスト教の歴史は、伝来、「繁栄」、「弾圧」、「潜伏」、「復活」の5つのキーワードが重要とされていますが、天草にもそれぞれに深い関わりがあることから、長崎と共に登録される可能性は十分考えられます。

その構成資産としては、西洋の建築技法と日本の技術を巧みに融合させた教会とその周辺の集落や自然とが一体になった「大江教会と農村・崎津教会と漁村の景観」が検討されています。これに伴い、天草市では世界遺産登録推進室を設置し、これらの地域の重要な文化的景観の選定に向けた組織的な取り組みがなされています。

さらに構成資産の対象となる地区の区長会と地区振興会を中心に「崎津・今富地区の世界遺産を目指す会」が今年の6月に結成され、今後の市民レベルでの活動が期待されています。

『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』について、詳しくは長崎県のホームページをご覧ください。

http://www.pref.nagasaki.jp/s_isan/

日本の近代化の先駆け

幕末における西洋技術の導入以降、日本は非西洋地域で初めて近代化を成し遂げました。なおかつ約50年という極めて短期間のうちに飛躍的な発展を遂げています。その発展の過程において、大きな原動力となった九州・山口地域の製鉄・造船・石炭・紡績など各地の産業遺産群が注目を浴びています。

このことから、平成18年度に九州、山口の6県11市の共同提案として『九州・山口の近代化遺産群 非西洋世界における近代化の先駆け』が提出されています。

22の構成資産のうち熊本県の関係遺産としては、荒尾市の「二井石炭鉱業株式会社三池炭鉱旧万田坑」と宇城市の「三角旧港施設(三角西港)」が含まれています。それぞれの価値については、左記のホームページに詳しく掲載されていますので、今回は、両市の取り組みを中心に紹介します。

鹿児島県「世界遺産登録を目指し」
<http://www.pref.kagoshima.jp/kyoiku-bunka/isan/kindai/touroku.html>

炭鉱のまち荒尾の第二のスタート

万田坑が国の重要文化財及び史跡に指定されたことに伴い、炭鉱としてのまちの歴史や風景を地域と

ともに後世に残すため、NPO法人「大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ」が設立され、三池炭鉱の情報発信や炭鉱関連施設の保存と継承に努められています。また、万田坑の魅力を伝え、全国に発信することを目的とした『三井三池炭鉱万田坑ファン倶楽部』が結成されています。この倶楽部の主な活動は、万田坑を視察・見学される方々に対しての現地ガイドや、敷地内の草刈り、坑内に残る機械類の保守整備及び炭鉱に関する資料の収集などです。近年ではNPO法人「大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ」と協働で写真撮影会やコンサートなどを行い、文化財という枠を超えた様々な活用イベントが展開され、保存活用の面から世界遺産登録推進を後押ししています。

近代化を支えた港 三角西港

三角地区では、昭和58年から郷土史家や町おこしグループなどによる有志一同が、三角西港を重要文化財に指定されることを目標にシンポジウムや調査などを行ってきました。地道な活動の成果は、昭和62年の開港100周年を契機に、旧三角町が一部の景観保全整備に着手するに至りました。その後、近代化遺産としての学術調査が実施され、文化財としての評価が高まると共に、平成11年には、『三角西港の文化・文学を考える会』が結成されました。様々な活動は、平成14年に国の重要文化財指定という大きな成果をもたらしました。現在は、世界遺産登録に向けたシンポジウムの開催や「三角西港ファンクラブ」の立上げなど周知啓発面に力を入れています。

世界の阿蘇へ 世界から未来へ

今回紹介した地域のように先ずは地域の誇りとし

て、着実に一步一步進むことが大切です。今後、熊本県と阿蘇郡市をあげて推進業務に取り組んでいきますが、地域の盛り上がりも重要になってきますので、民間レベルでの支援団体の立ち上がりも期待されています。

近年、世界遺産の持つブランド的な効果からか、全国各地で推進の動きがあり、一種の世界遺産ブームを巻き起こしています。実際、観光面を中心に多大な効果があることは間違いありませんが、本来、世界遺産とは、そのままではなくなってしまう貴重な遺産を、世界的見地から守って行こうというものです。

「阿蘇」が世界遺産になれば、周囲の景観を含めて国・県・市が協力して手厚く保護していくことになり、その結果、私たちが守り育ててきた「阿蘇」を、いい状態で次の世代へ引き継ぐことが可能になります。

また、名実ともに世界の「阿蘇」となり、地域の魅力も高まり、阿蘇に暮らす人々は当然のことながら、熊本県民の誇りと愛着がこれまで以上に強くなると思われれます。私たちの目の前に広がるこの壮大な文化的景観を世界へ、そして未来へ伝えるために、市民の皆さまのご理解とご支援をお願いいたします。

提案書『阿蘇・火山との共生とその文化的景観』の内容は左記のアドレスからご覧になれます。

熊本県教育庁文化課「くまもとの文化」
<http://www.pref.kumamoto.jp/education/hinokuni/index.html>

お問い合わせやご意見などは

教育委員会社会教育係 世界遺産担当まで

☎ 2232299

e-mail: kyouiku@city.aso.lg.jp